

# スピノザの神について（下）

——スピノザ研究（六）——

今 井 仙 一

## 九

スピノザ書簡集のうち最も興味のある個所の一つはボクセルとスピノザとの間に交された一連の往復書簡である。一六七四年九月十四日、すなわちスピノザが『エティカ』の最後の仕上げに従事しつつあった頃、彼の友人の一人ボクセルは彼に一つの短い書簡（第五一）を送り、幽霊、妖怪あるいは妖魔についての彼スピノザの見解をただした。いわく、あなたは果たしてそれらのものの存在を信ずるか、もしそれらが存在するとすれば、あなたはそれらを可死的と見るか、あるいは不死的と見るか。ボクセルによれば、古代人は明らかにそれらのものの存在を信じていた。近代の神学者や哲学者もまたそうした被造物を信じている。そして事実、古代の歴史全体はそれらについてあまりにも多くの例証と叙述とに満たされているので、それらの存在を否定したり疑惑したりすることは殆んど不可能だと思われる。だが、それはそれとして、ともかくスピノザ自身はそうしたものの存在をみとめるかどうか、その答えをお待ちしたい。——ボクセルはこのように質疑したのであった\*。

スピノザの神について（下）

\* Opera IV. pp. 241-2. ボクセルとスピノザとの往復書簡はいずれもオランダ語で交されたものであるが、スピノザは、おそらく公刊の目的で、それをラテン語に訳している。右の第五一書簡はオランダ語の原書簡が失われ、ラテン語のみが残されている。——なお、ボクセル Hugo Boxel はヤン・デ・ウィット一派にぞくする政治家で、一六五五年以降、その生都ゴルクム Gorcum の市政長官あるいは市会々長として市政に参与していたが、一六七二年ウィットの殺害されたのち、オランニエ公によって罷免され、その地位を追われた。

それに対してスピノザは直ちに返書(第五二)を送っているのであるが、その中で彼は、ボクセルの読んだあらゆる妖怪談の中から、最も疑いの余地の少ない、そして妖怪の存在を最も明白に証明しているものを選び出してもらいたいと願っている。というのは、スピノザ自身は今までに、妖怪の存在を明白に証明するに足るようないかなる信頼しうる著者をも読んだことがなく、従って彼は、今日まで、妖怪とはいかなるものかを知らず、また誰一人としてそれについて彼に解明を与えることを得なかったからである。そのあとで彼は書いている。「これらの妖怪 Spectra あるいは妖精 Spiritus とは一体どのようなものであるか、どうぞそれを言って下さい。それは子供ですか、馬鹿ですか、それとも狂人ですか。と言いますのは、私が彼らについて聞いたところの事柄は、知性的な存在よりもむしろ痴呆的な存在を思わせ、そして、穏やかに言っても、子供っぽいこと、または愚者の喜びそうなことと見えるからです」\*。

\* *ib.*, p. 244.

それに対する返書(第五三)において、ボクセルは、彼自身はどこまでも妖精の存在を信ずると断言し、そしてそれについて四つの根拠をあげている。いわく、一、彼らの存在することは宇宙の美と完全性にとって不可欠である。二、創造者が彼らを創造したことは真実らしく思われる、というのは、彼らは、物的な存在よりもより以上創造者に似たものであるから。三、精神のない物体の存するのと同様に、物体(身体)のない精神もまた存在する。四、最高の天から最低の地上に及ぶ無限の空間は決して空虚なものではありえず、そこにあらゆる種類の霊あるいは妖精が

存すると見られねばならない。「ただ、おそらく、女性的な妖精は決して存在しないでしょうが」。

ついでボクセルは、世界は偶然によって *fortuito* 生じたという様な謬まった考えをもつ人々はおそらく右のような推論を確信することをええないであろうと語り、そして妖精の存在を証示する古今の文献を列举する。その著者はプルタルク、スエトニウス、ウィエリウス、ラファーター、カルダヌス、メラントン、さらにまた小プリニウス、ヴァレリウス・マクシムス、アレクサンドリアのアレクサンドロス、等々である。最後にボクセルは、ラファーター *Lavater* がその『妖怪論』の第一巻の終りに語ったつぎの言葉をあげて右の書簡を閉じている。いわく、「古代ならびに近代のかくも多くの一致せる証人を敢えて拒否せんとする者は、私の見るところ、断じて信を措くに足らない。なぜなら、妖怪を見たとき主張するすべての人々を無造作に信ずることが軽信の徴候であると同様、かくも多くの信頼すべき歴史家、教父、その他の尊敬すべき人々を軽卒かつ無遠慮に否認することは、これまた非常に大きい鉄面皮であるからである」\*。

\* *ib.*, pp. 245-250.

これに対する返書（第五四）において、スピノザは、右の著者たちのうち彼の手許にあるのはただプリニウスとスエトニウスだけであるが、しかしこの二人を読んだだけで、すでに彼はその他の人々を研究する労苦を免除されたと信ずる、というのは、彼は、彼らがすべて同じような妄想に囚われており、人々を驚かせるような異常な出来ごとの記述に特別の嗜好を有することを確信するからである、と語り、ついでつぎのように書いている。「あなたが一方男性の妖精の存在は疑おうとせず、他方しかし女性の妖精の存在を疑われているのは、私には、実際の疑惑によるよりも、むしろたんなる空想によるもののように思われます。と言いますのは、もしそれが実際あなたのご見解であるとすれ

ば、それは私には、神をもまた男性とみなし、女性とはみなさない民衆の想像とほぼ一致するもののように思われるからです。裸体の妖精を見た人々がその生殖器に目を向けなかったのを私は不思議なことだと思えます、——おそらくは恐怖からでしょうか、あるいは彼らは性の区別については何一つ知らなかったからでしょうか。

ついでスピノザは、世界は果たして偶然によって生じたものかどうかを問題として取り上げる。彼によれば、偶然的、Fortuitum と必然的、Necessarium とは二つの相反的な概念であり、したがって、世界を神的本性の一つの必然的結果とみなす者は最初から偶然による世界の生起を否定するのであり、それに反して、神は世界の創造を中止することをも得たであろうと主張する者は、もちろん別の言葉をもってではあるが、世界は偶然によって生じたものと断言するのである。というのは、その場合、世界は一つの意志決定、生ぜざることもあり得たであろう一つの意志決定、をその出発点とすることとなるからである。ところでスピノザ自身は世界を神的本性の必然的結果として把え、そしてたとえ彼が時として神の意志について語ることがあっても、しかも彼はそれが人間の意志とは全く異なるものであって、ただその名前を共有するにすぎないことを確信する。にも拘らず、神の意志について語ることは神的本性と人間的本性との混同を生ずるおそれがなくもないので、スピノザは意志とか知性とか注意とか聴覚とか、等々の人間的諸特性を神に帰属せしめることを拒否しようとするのである。

さて、右にボクセルは妖怪の存在について四つの根拠を挙げたのであるが、スピノザによれば、それらは根拠 *non* というよりもむしろ臆測 *conjectura* と呼ばれて然るべきものであった。しかしそれでも、その一々についてスピノザは簡潔な反駁を試みている。第一に妖怪の存在が宇宙の美と完全性にとつて不可欠であるとの見方に対しては、彼は美とか完全とかいう評価がたんに主観的かつ相対的なものにすぎないことを指摘する。その中には「最も美しい

手も顕微鏡で見れば恐ろしく見える。多くのものは、遠方から見れば美しく、近くで熟視すれば醜い」といった言葉もある。第二に彼は、妖精が物的存在よりもより以上神に類似しているといった思想を斥け、そしてつぎのように語っている。「もし私が妖怪について三角形あるいは円についてと同様に明晰な観念を有っていたとすれば、私はそれらが神によって創造されたことに全く何の疑念も抱かないでしょう。しかし私がそれらについて有する観念は、私が私の想像の内に見いだすハルピュイア、グリフィン、ヒドラ<sup>\*</sup>、等々についての諸観念と完全に一致していませんので、私はそれらを、あたかも非存在者が存在者と異なると同じだけ神とは異なるところの夢想としか見なすことができないのです」。第三にスピノザは、記憶、聴覚、視覚、等々のない物体があるからといって、果たして物体(身体)のない記憶、聴覚、視覚、等々が存在すると言えるだろうか、また、一つの円は球なしに存在するからといって、果たして一つの球が円なしに存在すると言えるだろうか、と反問する。第四に彼は、最高の天とか最低の地上とかいった表象は地球を宇宙の中心と見る見方にもとづくものであることを指摘し、要するに右のような諸論拠をもって妖精の存在を推論しようなどすることはバカげた迷信以外の何ものでもない<sup>\*\*</sup>と結論する。

\* いずれもギリシア神話における怪物。ハルピュイアは女面鳥身の怪物、グリフィンは鷲頭、獅子身、有翼の怪物、ヒドラはヘラクレスに殺された九頭の水蛇。

\* \* *ib.*, pp. 250-4.

これに対する答書(第五五)において、ボクセルは、はじめにまず、「私はいかなる女性の妖怪も存しないと信じます、と言いますのは、私は妖怪たちにおける生殖を否定するのですから」と語り、ついでスピノザが意志、知性、聴覚、視覚、等々の特性あるいはそれら特性の活動を神に帰属せしめることを拒否した点に言及し、そして「もしあ

あなたがこれらの諸活動、および、神についての我々の最高の諸考察を否定し、そしてそれらのものは優越的かつ形而上学的に神のうちに存在するのではないと主張されるとすれば、私はあなたの神を知らず、あるいは、あなたがこの神という言葉のもとにどのようなものを理解されているかを知らないのです」と語り、また、「もしあなたが神に必然性を帰し、そして神から意志と自由な選択とを取り去るならば、ひとは、あなたが、無限に完全な存在者たる神をあたかも一個の怪物 *monstrum* の如きものとして叙述しかつ描写するのではないかと疑うこともできるでしょう」とも語っている。ついでボクセルは、確實無疑の証明といったものは数学以外の世界では極めて稀にしか見いだされないこと、我々は多くの事柄については単にありそうな、あるいは蓋然的な臆測でもって満足せねばならないことを指摘し、そして、「神もまた精神 *spiritus* であるがゆえに、私は諸妖精 *Spiritus* は神に似たものだと言うのです。あなたは諸妖精についても三角形についてと同じだけ明晰な観念を有つことを要求される、——しかしそれは不可能です。一体あなたは神についてどのような観念をお有ちになるのか、そしてその観念は、あなたの知性にとって、三角形の観念と同じだけ明晰なものであるかどうか、お願いです、それをどうぞ言って下さい。あなたがそうした明晰な観念をお有ちでないことを私は知っております。そして私のすでに言いましたように、我々は諸事物を確實無疑の推論によって理解できるほど幸福ではないのであり、そしてこの世の中では大抵の場合蓋然的なものが優勢を占めているのです」と語っている。最後に彼は、古来多くの哲学者が妖精の存在を信じたことに言及し、そしてソクラテスの信じたダイモンを初めとして、すべてのストア学徒、ピタゴラス学徒、プラトン学徒、逍遙学派の学徒、エンペドクレス、マクシムス・ティリウス、アプレユスおよびその他の人々を挙げ、さらに近代の哲学者もまた誰一人として妖精を否定していないと語り、そしてかくも多くの哲学者、歴史家の証言を否定しようとするスピノザの見解はどうて

い人を納得せしめうるものではないと結んでいる\*。

\* *ib.*, pp. 254-8.

それに対する答書（第五六）において、スピノザは、初めにまず必然、*Necessarium* と自由、*Liberum* とは決して二つの相反者ではないこと、かえってその本性の必然性に従って行為する神はまさにそれゆえに最も自由に行為するものとみなさるべきことを指摘したのち、\* つぎのように語っている。「あなたはさらに、もし私が神において、見る、聞く、注意する、意志する、等々の行為が彼の内に優越的に *eminenter* 存在することを否定するとすれば、私が一体どのような神を有するかがあなたにはハッキリ分からないと言われる。そこからして私は、あなたが、あたかも上述のような諸属性で表現される完全性よりもより以上に大きい完全性は存在しないと信じていられるかのような印象を受けます。だが、私はそれを不思議とは思いません、と言いますのは、もし一つの三角形がただ口を利くことさえできたとすれば、それは、ちょうどあなたと同じように、神は優越した仕方では三角形的であると語り、また一つの円は、神的本性は優越的な意味で円形的であると語るであろうこと、そしてそのような仕方では一切のものは自己の有する属性を神に帰し、かくて神を自己に類似したものとし、そしてそれ以外の属性は彼らにとって醜いものと思われるであろうこと、を私は信ずるからであります\*\*。」

ついでスピノザは、日常生活においてはたしかに我々は蓋然性でもって満足せねばならないであろうが、しかし思弁に際してはどこまでも真理を追求せねばならないことを述べている。たしかに人間は、もし彼が与えられた食物および飲料が自分にとって有益であるとの完全な証明を獲得するまでは断じて飲食しようとしないとすれば、おそらく餓えかつ渴いて死ななければならぬであろう。だが、真理を探究する立場にあっては、我々は決して蓋然性の域に

とどまってはならず、どこまでも明晰判明な認識を求めて努力せねばならないのである。

ついてスピノザは語っている。「私が神について三角形についてと同じだけ明晰な観念 *idea* を有つかどうかのあなたの質問に対しては、私は『しかり』と答えます。しかしもしあなたが、私は神について三角形と同じだけ明晰な表象 *imago* を有つかどうか、と質疑されるならば、私は『いな』と答えます。なぜなら我々はたしかに神を表象することはできない、だが、認識することはできるからです。その際しかしつぎの点に留意して頂きたい。私は神を完全に認識する、と言うのではありません。私は神の属性のすべて、あるいは大部分、を認識するわけではなく、たんにその中の若干のものを認識するにすぎない、と言うだけなのです。しかし大多数の属性についての無知は、私がその中の若干のものの知識を有することを決して妨げないことは確かです。それはちょうど、私がユークリッドの幾何原本を学んだとき、私はまず最初、三角形の三つの角は直角に等しいことを認識し、そして、多くの他の特性についてはなお無知であったにも拘らず、しかも三角形のこの特性のみは明晰に理解したのと同じなのです。\*\*\*

最後にスピノザは、原子論者、わけでもデモクリトスに対する彼の高い評価を瞥見せしめつつ次ぎのように語っている。もとよりそれはスピノザその人の哲学が直ちに原子論的であったことを証示するものではないであろう。しかしそれは、少なくとも、ガリレーの影響のもとに近代自然科学の洗礼を受けたスピノザにとって、古代の哲学者たちのうちでも特に科学的・唯物論的傾向を代表したと見られる原子論者たちの方が、他の観念論者たちよりもより親しきものと感ぜられたことを証示するとは言えるであろう。いわく、「プラトン、アリストテレス、ソクラテスの権威は私にあっては大した重要性はもちません。もしあなたがエピクロス、デモクリトス、ルクレチウス、あるいは一人の原子論者または原子の信奉者をお挙げになったとすれば、私はたしかに驚いたことでしょう。しかし、もろもろの隠



秘な性質、作為的な種、実体的形相、その他多数の妄想を案出した人々が、デモクリトスの権威を弱めるために、さらにまた妖精や幻影を捏造しそして「魔法使いの」老女どもに信を描いたとしても、それは何ら驚くべきことではな  
いでしよう。その人々は、デモクリトスがあれほどの賞讃を受けて出版したすべての書物を焼き捨ててしまったほど、  
それほど彼の名声に対して嫉妬的であったのです。(後略)\*\*\*

\* この点については拙稿「いわゆる意志の自由について」、同志社法学第八七号七頁以降を参照されたい。

\* \* Opera IV, p. 260. — 周知のように古代ギリシアの哲学者クセノパネスは、無知な大衆の擬人的神観を嘲笑して、「エチオピア人は彼らの  
神々を色黒く獅子鼻のものとする。トラキア人は彼らの神々に青い目と赤い髪とをあたえる」と語り、また、「もし牛や馬やライオンが手をも  
って絵を描き、人間のように芸術品を作るならば、馬は神の形を馬に似せて描き、牛は牛に似せて描くであろう」と語っている。スピノザがこ  
こで三角形や円について語ったとき、彼の脳裡にはそうしたクセノパネスの言葉も想起されていたのではなからうか。

\* \* \* *ib.*, p. 261. — さぎに見られたように、スピノザによれば、神は無限に多くの属性から成る実体であるが、それら属性のうち、われわれ  
人間の認識しうるものは、ただ延長と思维との二つあるのみであって、その他の属性についてはわれわれは全然無知である。しかしそのことは、  
われわれがこの二つの属性を明晰判明に認識することを決して妨げないのである。

\* \* \* \* *ib.*, pp. 261-2.

ボクセルとスピノザとの間の興味ある往復書簡は以上をもって終っている。

## 10

右の最後の書簡からしても明瞭にうかがえるように、スピノザが終始けわしく斥けようとしたのは、人間精神に根  
ざし深き擬人的神観であった。いかなる仕方においてであれ、神を人間的なもの、どこか人間に類似したものとし  
て捉えようとする見方であった。もし三角形あるいは円が神について語りえたとすれば、それらは神を優越的な仕方  
で三角形的あるいは円形的として表象するであろうし、また牛や馬やライオンなどは、彼らの神をそれぞれ自己の形

に似せて、あるいはツノのある神、あるいはタテガミのある神、等々を描き出すであろう。それと同様に人間もまた、どれほど崇高なものとして表象するにもせよ、しかも神をどこまでも人間に似たものとして表象しようとするのである。「神その像の如くに人を創造たまへり」という『創世記』の言葉はそのことを逆の形で表現したものに外ならない。なぜなら人間が神の像の如くに造られたということは、人間を造った神が彼の造った人間とどこか類似したものであることを推測せしめるに十分だからである。もっとも、ここでの「像」はたんなる身体的外形のごときを意味するのではない、精神的本質を意味するものと解さるべきだ、と言われるかも知れない。神は純粹に精神的な、非物体的な存在として、すべての物を空間的・物的に描き出そうとする我々の表象力を全く超越したものと解さるべきだ、と言われるかも知れない。しかしそれでも、我々人間の精神が神の如くに作られたものであるとすれば、神的精神と人間的精神との間には、たとえどれほどの距離はあっても、しかもどこか共通したものが存すると見られねばならないであろう。かくてもし我々の精神の内に愛するとか意志するとかいう作用が存するとすれば、それと同じ作用は神の精神の内にも存すると見られねばならないであろう。そして事実多くの人々はそのように考えており、右にボクセルもまたそのように考えた。もっともそれは我々人間においてのように、不純な、不完全な形においてではない。神は無限に完全な存在であり、したがって神の愛、神の意志、等々はどこまでも完全無欠なものと考えられねばならない。換言すれば、我々が自己の精神の内に見いだす諸々の作用乃至活動は、最も完全な形で、いわゆる優越的 *eminenter* な仕方、神の内にも存するものと見られねばならない。——このように主張されるわけである。クセノパネスの指摘したように、エチオピア人は彼らの神々を色黒く獅子鼻のものとし、トラキア人は彼らの神々に青い目と赤い髪とをあたえる。そして現代においても多くの人々は彼らの崇拜する神に人間的な姿と形とを、すなわち彼らの

身体に類似した身体を、あたえるのが常である。それはおそらく最も粗笨な形での擬人的神観と言われてよい。それに反して神を純粋な精神として捉え、我々人間にあっては不純にして不完全な諸々の精神的作用乃至活動が優越的に完全な形で神の内に存在すると見る右の見方はそれほど粗笨なものではない。にも拘らず、それもまた一種の擬人的神観たることを免がれないであろう。また王とか君主とか立法者とか、総じて人間的な資格を神に帰属せしめ、かくて神を宇宙の立法者、支配者といった風に考えるのもまた一種の擬人的神観たることを免がれない。さきの粗笨な一般大衆的神観が哲学的考察と縁なきことは勿論である。しかし幾分洗練された形での擬人的神観は、時として、万物の根源を究めようとする哲学的考察の中にも微妙に介入して、この考察の純粹性を傷けるおそれを持たないではない。スピノザが終始それを問題とし、不断にそれと抗争したのは、そうした形での擬人的神観であったのである。

『エティカ』第一部の定理八はさきに（八において）見られたように「あらゆる実体は必然的に無限である」である。この定理の註二においてスピノザは語っている。「（前略）。なぜなら、事物の真の原因を知らない者は、一切のものを混同し、その精神のうち何らの抵抗をも感ずることなしに、樹は人間と同様に物を言うと言空想したり、人間は種子からして形成されると同様、また石からしても形成されると想像したりする。すなわち一般に、あらゆる形態はあらゆる他の任意の形態に変わることができると想像する。それと同様、神的な本性を人間的な本性と混同する者は、極めて容易に神に人間的な諸感情を帰属させる、わけても、いかなる仕方でも諸感情が精神の内に産出されるかが彼に知られない限りにおいては特に然りである」\*。

\* Opera II, pp. 49-50.

第一部定理一五は、これまたさきに見られたように、「存在するすべてのものは神の内に在り、いかなるものも神

スピノザの神について（下）

なくば在りえず、かつ思念されえない」である。この定理の註においてスピノザは語っている。いわく、多くの人々は、神は人間と同様、身体と精神とから成り、そして諸々の激情に従属する、と想像する。だが、これほど神の眞の認識から隔たった考えはありえない。というのは、人は一般に身体（物体）のもとに、長さと幅と深さとを有し、一定の形状によって限界づけられた一つの量を理解するのであるが、しかしそうしたものが絶対に無限なる存在としての神に帰されえないことは自明の事柄だからである。しかし、神が身体（物体）的存在でないということは、決して永遠にして無限なる本質を表現する一つの属性としての延長 *Extensio* が神に帰属することを否定するものであってはならない。（この属性・延長をスピノザはこの註では「物的あるいは延長的な実体」 *substantia corporea sive extensa* という風に呼んでいる）。しかるに多くの人々は神にそうした延長を帰属せしめることを否定する。そして彼らの理由とするところはつぎの如くである。いわく、延長（あるいは物的実体）は諸々の部分から成っており、かくて可測的かつ可分的である。しかるに或る物が分割されるということはそれが外部からの作用を受けることを意味する。すなわち受動的たることを意味する。こうしたものを神に帰属せしめることは、無限に完全であり、絶対に能動的な神を傷つけることとならねばならない。これが人々の挙げる理由である。これに対してスピノザは、神の属性たる限りでの延長が唯一にして無限であり、かかるものとして絶対に不可測かつ不可分なることを詳しく説明しているのであるが、私はいまそれに立ち入ることを控え、たんにつぎのようなスピノザの言葉を引用するにとどめておきたい。いわく、「さて、もし人が、我々はなぜに、本性上、量を分割する傾向を有するのか、と質疑するならば、私は彼につぎのように答える、いわく、量は我々によって二つのちがった仕方思念される、すなわち一方、我々がそれを表象する場合のように、抽象的あるいは表面的にであり、そして他方、実体としてであり、そしてこれはただ

知性によってのみ生ずる。したがってもし我々が、量を、それが表象力のうちに *in imagination* 在るような仕方  
で注視するならば——そしてこのことは屢々生ずることであり、また我々にとって一層容易なことなのであるが——、  
そのとき量は有限にして可分的であり、諸々の部分から合成されたものとして現われるであろう。しかし我々が、量を  
それが知性の内に *in intellectu* 在るような仕方  
で注視し、そしてそれを実体たる限りにおいて思念するならば——  
このことは極めて困難なのであるが——、すれば量は、我々のすでに十分に証明したように、無限、唯一、そして不  
可分的なものとして現われるのである\*。さらにスピノザは、右に彼が物的あるいは延長的実体と呼んだ属性・延  
長をさらに物質 *materia* と呼びかえてつぎのように語っている。「物質はいたるところ同一なるものであり、従って  
人が物質を種々の仕方  
で変容されたものとして思念する限りにおいてでなければ、その内に諸々の部分が区別される  
ことはできない。すなわち、物質の部分なるものは、ただ様態的 *modaliter* にのみ区別されるのであって、決して  
実在的 *realiter* に区別されるのではない。たとえば水は、それが水である限りは、可分的と思念され、かつその諸部  
分は相互に可分的の思念される。しかし水は物的実体たる限りにおいては、そのようには思念されえない。けだ  
し、その限りにおいては、水は分離もされず、分割もされないからである。さらに、水は、水としては、発生しかつ  
消滅する。だが、実体としては、発生することも消滅することもないのである。(中略)。なぜに物質が神的本性にふ  
さわしからぬものであるかが私には分からない。と言うのは、(定理一四によって) 神のほかには、物質がそれから  
して作用を受けるいかなる実体も存しないからである。私は言う、一切のものは神の内に在り、生起する一切のもの  
はただ神の無限なる本性の諸法則によってのみ生起し、そして神の本質の必然性からして生ずるのであると\*\*。

\* *Opera II*, p. 59.

スピノザの神について(下)

\* \* *ib.*, pp. 59-60. — 定理一四は、さきに見られたように、「神のほかにはいかなる実体も存在しえず、かつ思念されえない」である。

第一部の定理一七の系二は「ただ神のみが自由な原因である」であった。これにスピノザはやや長い一つの註を附している。その中で彼は語っている。いわく、多くの人々は、神は彼の意向のままにいかなることをも生ぜしめることができ、それゆえにこそ一つの自由な原因と呼ぶべきだと考える。もし神がそれを欲したとすれば、三角形の本性からしてその三つの角が二直角に等しいことが派生しないことも、また一つの与えられた原因からいかなる結果も生じないことも、可能となりえたであろう。このように彼らは考える。しかしそれは、スピノザから見れば、定性なき恣意と選ぶところのない一つの自由意志を神に附与することによって、かえって神を人間の次元にまで引き下げようとする謬想以外の何ものでもありえない。神はその時その時の気紛れにに応じて任意に行動しうるがゆえに自由な原因と呼ばれるのではない。かえって神はその本性の必然性からして存在し、そしていかなる外的原因によっても左右されず、ただその本性の必然性からのみ行動するが故にのみ、真に自由な原因と呼ばれるのである。スピノザのいう自由な原因は一般の人々の考える自由意志的な原因とは峻しく区別さるべきである。けだしもともと彼によれば「神の本性には知性もまた意志も帰属しない」からである。“*ad Dei naturam neque intellectum, neque voluntatem pertinere.*”多くの人々のするように、人間において最も完全なものは知性ならびに意志と考えられるところから、直ちにこれらを神に転置し、かくて神に最高の知性と一つの自由な意志とを帰属せしめることは、まさに神を人間化する試みに外ならないと言われねばならない。しかしいま仮りに一步をゆずって、知性と意志とが神の永遠なる本質に属することを承認するとしても、しかも我々は、神に帰せられたこの両属性が、通常人々の考えるものとは全然異なるものであるだろうことに十分留意するのだからなければならない。「なぜなら、神の本質を構成するであろうところの知性と意志

とは、我々の知性および我々の意志とは天地の隔たりをもつものでなければならず、たかだかただその名称においてのみそれと一致することができる、それはちょうど星座の犬と吠える動物の犬とがただその名称においてのみ相互に一致すると同様である\*。

\* *ib.*, pp. 62-3.

第一部の定理三一は、さきに見られたように、「たとえそれが有限なものであれ、あるいは無限なものであれ、とまれ現実的な知性、ならびにまた、意志、欲望、愛、等々は、所産的自然に帰せらるべきであって、能産的自愛に帰せらるべきではない」であった。しかるに能産的自然とは、定理二九の註に言われたように、「自由な原因とみなされた限りでの神」にほかならず、したがって右の定理三一は、知性、意志、欲望、愛、等々の諸様態を神に帰することを拒もうとしたものにほかならない。この定理の証明はつぎの如くである。いわく、「すなわち知性 *intellectus* のもとに、私は（直接に明らかかなように）絶対的な思惟 *absoluta cogitatio* を理解せず、たんに思惟の或る一つの様態のみを理解する。この様態〔知性〕は、欲望、愛、等々の他の諸様態から区別され、したがって（定義五によって）絶対的思惟を通じて思念されねばならない。すなわち知性は（定理一五ならびに定義六によって）神の一つの属性、思惟の永遠にして無限な本質を表現するところの一つの属性、を通じてつぎのような仕方ですなわちこの属性なくば知性は在りえずかつ思念されえないような仕方ですなわち思惟されねばならない。それゆえに知性は（定理二九の註によって）思惟の他の諸様態と同様、所産的自然に算入され、能産的自然に算入されてはならないのである。Q. E. D.】\*\*\*

\* 定義五は、さきに示されたように、「様態のもとに、私は、実体の諸発現、あるいは、他者のうちに在り、かつその他者を通じて思念されるところのものを理解する」である。

\*\* 定理一五は、同じくさきに示されたように、「存在するすべてのものは神の内に在り、いかなるものも神なくば在りえず、かつ思念されえ

スピノザの神について（下）

ない」であり、定義六は「神のもとに、私は、絶対に無限なる存在、すなわち、その各々が永遠にして無限なる本質を表現する無限に多くの属性から成るところの実体、を理解する」である。

\* \* \* 定理二九の註において「所産的自然のもとに、私は、神の本性の必然性、あるいは神の諸属性の必然性、から生起する一切のもの、すなわち、神のうちに在り、神なくば在りえずかつ思念されぬものと見られた限りにおいての、神の属性のすべての様態を理解する」と言われている。

\* \* \* Opera II, p. 72.

第一部定理三二は「意志は一つの自由な原因と呼ばれることを得ず、かえってただ一つの必然的な原因とのみ呼ばれることができる」である。その証明においてスピノザは語っている。いわく、意志は、知性と同様、たんに思惟の或る一つの様態であるにすぎず、従ってあらゆる個々の意志作用は、それが他の原因によって決定されるのでなければ存在することをえず、かつ活動へと決定されることをえない。この後者は再びまた一つの他の原因によって、かくのごとくにして無限にいたる。このことはたんに有限な意志についてのみではなく、無限なものとして想定された意志についても妥当する。換言すれば、たとえ無限の意志が神に帰属すると想定されとしても、しかもその意志もまた決して自由な原因とは呼ばれえず、かえってただ必然的な原因とのみ呼ばるべきであるのである。

右の定理にスピノザは二つの系を附している。系一は「神は意志の自由から活動するのではない」である。系二は「意志ならびに知性の神の本性に対する関係は、運動と静止、および一般に、ある仕方で存在しかつ活動するよう神によって決定された一切の自然物、の神の本性に対する関係と同じである」である。すなわち運動と静止とが属性・延長の一樣態であるのと同様、意志と知性とは属性・思惟の一樣態であり、かかるものとして、それらは、実体たる神、すなわち能産的自然に帰属するものではなく、ただ諸様態の総体としての所産的自然にのみ帰属するものと考えられねばならないのである\*。



\* *ib.*, p. 73.

定理三三はさきに（八において）見られたように、「諸物はそれが現に産出されたのと異なるいかなる他の仕方によっても、またいかなる他の秩序においても、神によって産出されることをえない」であった。この定理の註二において、スピノザは、神は意志の自由によって行動し、従って諸物をそれが現に産出されたのと異なる他の仕方、他の秩序によっても産出することができた筈である、といった通常の考え方に対してやや詳しい反駁を加えている。その結論として彼は言う。いわく、かりに神に知性と意志とが帰属するとしても、しかもそれは神の本質と異なるものではありえない。従ってもし諸物が現に在るのと異なる他の仕方でも産出されたものと仮定すれば、諸物の原因たる神の知性と神の意志、すなわち神の本質そのものが、現に在るのと異なったものとして思念されねばならないであろうが、これは全き背理であると。——すなわちスピノザは世界過程の永遠から永遠にわたる必然性を神の本質そのものの永遠なる不変・恒常性にもとづけようとしたのであった。

しかし神に恣意的な自由意志を帰属させようとする右の見解よりもさらに一層真理に遠いものは、スピノザによれば、神はつねに善を目ざしてのみ一切の事がらをなす、と見る見方であった。「なぜならこの見解は、神に依存せざる或るもの、神がその行動にさいしてあたかも一つの模範のごとくにそれを注視し、あるいは一定の目的のごとくにそれを追求するところの或るもの、を神の外部に想定するからである。これは実際、神を運命 *fatum* に従属させることにほかならず、これ以上に背理な事がらを、一切の事物の本質ならびに存在の第一のかつ唯一の自由原因たる神について主張することはできないのである\*」。

\* *ib.*, p. 76.

スピノザの神について（下）

『エティカ』第一部の終りには、いわゆる目的論的偏見の批判にあてられた比較的長い一つの「附録」Appendix が附せられている。この附録については私は拙稿「いわゆる意志の自由について」\*の中でやや詳しく語っておいたので、ここではたんに二、三の要点を抄記するにとどめておきたい。

\* 同志社法学第八七号、一五頁以降。

一般に人々は考える、自然におけるすべての事物は、彼ら自身と同様、つねに一つの目的のためにのみ行動する、いな、諸事物のみではない、自然の創造者にして支配者たる神そのものが、すべての事柄を一定の目的によって指導するのである。かくてある人々はいふ、神は一切の事物を人間のために、そして人間を、人間が彼(神)を崇拜せんがために作ったのである。スピノザによればこれは全く根拠のない一つの偏見にすぎなかった。そしてこの偏見の基礎にあるものは、いわゆる自由意志の謬見と、人間中心的な世界の見方と、そして擬人的な神観とにほかならなかった。人々は自分たちが自由な意志をもって行動せるものと錯覚する。そして彼らの追求するものはつねに彼ら自身の利益である。ところで自然の中にはたとえば彼らの栄養のための野菜や動物、また魚を養うための海、といった彼らにとって有利と思われる種々の事物が存在する。そこからして彼らは、人間と同様意志の自由をそなえた自然の支配者があって、それが一切の事物を彼らのために配慮し彼らのために作り出したと考えることとなるのである。スピノザはこうした目的論的偏見を徹底的に排撃する。そして自然を必然的な原因・結果の関連として認識しようとする努力を怠り、彼らの理解を超えたあらゆる事象の説明を無造作に神の意志に求めようとする多くの人々の愚昧を指摘し、そうした場合の神の意志 *Dei voluntas* を無知の避難所 *ignorantiae asylum* と呼んでいるのである。

『エティカ』第二部は「精神の本性と起原について」である。始めにやはり一連の定義と公理とが掲げられ、それから諸々の定理と証明とが展開される。定理一は「思惟 *cogitatio* は神の一屬性である、あるいは、神は思惟するもの *res cogitans* である」\*である。定理二は「延長 *extensio* は神の一屬性である、あるいは、神は延長せるもの *res extensa* である」\*である。さきに第一部の定義六に言われたように、スピノザによれば、神とは絶対に無限なる存在すなわち、その各々が永遠にして無限なる本質を表現する無限に多くの屬性から成るところの実体であったのであるが、それらの屬性のうち我々人間によって認識されうるものはただ思惟と延長との二つあるのみと考えられ、そしてそれが右の二定理として表現されたわけである。

\* *Opera II*, p. 86.

神は「思惟するもの」であり、また「延長せるもの」であると言われるとき、我々はもとよりそこに自然界の諸個物のように有限にして可滅的な精神あるいは物体のごときを理解すべきではない。かえってこれらのものの根柢にあって、これを自己のある仕方での発現あるいは様態として初めて可能ならしめ、かついわゆる内在的原因としてこれらの一切を自己の内に含むところの永遠にして無限なる思惟的実体あるいは延長的実体をのみ理解すべきである。たとえば円とか三角形とかは無限なる延長のある一定の仕方での限定として初めて可能であると同様、一切の有限なる延長的個物（物体）は無限なる延長のある一定の仕方での発現あるいは様態として初めて可能であり、また一切の有限なる思惟的個物（精神）ならびにそれの諸々の思惟作用は、すべて無限なる思惟のある一定の仕方での発現あるいは

は様態として初めて可能であるのである。かくて右の定理一の証明にいう。「個別的な諸思惟、あるいはこの又はかの思惟は(第一部定理二五の系によって)神の本性をある一定の仕方では表現する諸様態である。従って神には(第一部定義五によって)一つの属性、その概念はすべての個別的思惟を内に含み、これらのものがそれを通じて思念されるところの一つの属性、が帰属する。従って思惟は、神の永遠にして無限なる本質を表現する(第一部定義六を見よ)無限に多くの神の属性の中の一つである、あるいは、神は思惟するものである。Q. E. D.」\*

\* *ib.*, p. 86. — 第一部定理二五の系は「個物は神の属性の発現、あるいは、神の属性がそれによって或る一定の仕方では表現されるところの様態にほかならない」である。——なお、神の絶対的思惟とその諸様態としての知性、欲望、意志、愛、等々との関係については、右に(一〇において)見られた第一部定理三一ならびにその証明が参照されるべきである。

第二部定理三は「神の内には必然的に彼の本質、および彼の本質から必然的に生起するすべてのもの、についての一つの観念が存在する」である。この定理に附せられた註においてスピノザは語っている。いわく、一般大衆は神の力 *Dei potentia* のもとに神の自由意志とそして存在するすべてのものに対する彼の権利とを理解する。そしてこの見方からすれば、存在するすべてのものは一般に偶然的と考えられる。というのは、神はすべてのものを任意に破壊しこれを無に変ぜしめる力を有する、と見られるからである。さらにまた彼らは極めてしばしば神の力を諸王の力 *Potentia Regum* になぞらえる。しかしそれらすべては誤謬である。けだし神が自身自身を認識すると同一の必然性をもって無限に多くのものが無限に多くの仕方において永遠なる神の本質から生起しなければならぬからである。一般に人は、神をただ人間としてのみ、あるいは人間の像に似せてのみ思念する。そこからして彼らが神に帰属せしめようとする力もまたあくまで単に人間的な力であるにすぎず、大抵の場合それはかえって無力の徴表でしかありえないのである。\*

\* *b.*, p. 87.

第二部定理七は「諸觀念の秩序および連結は諸物の秩序および連結と同一である」である。この定理の註においてスピノザは、すべての屬性は唯一の実体に帰属すること、従って思惟的実体と延長的実体とは一にして同じき実体であり、たんにそれがあるいはこの屬性のもとに、あるいはかの屬性のもとに把握されたにすぎないこと、同様にまた延長の一つの様態（すなわち物体）とそしてこの様態の觀念（それは思惟の一つの様態である）もまた一にして同じきものであり、ただそれが時に応じて二つの異なる仕方において表現されたにすぎないこと、を指摘している\*。

\* *ib.*, p. 90.

第二部定理一一は「人間の精神の現実的存在を構成する第一のものは現実的に存在する一つの個物の觀念にほかならない」である。ここに「現実的に存在する一つの個物」というのは各個人の身体を指すものにほかならず、そこからして人間の精神は「身体の觀念」であり、また人間の身体は「精神の客体」であると言われるのであるが、この間の關係については別の機会にいますこし詳しく窺うこととしたい。ところで右の定理の系はつぎのごとくである。いわく、「そこからして人間の精神は神の無限なる知性の一部分であることが帰結する。Hinc sequitur Mentem humanam partem esse infiniti intellectus Dei; したがって、人間の精神がこのもの又はかのものを知覚する、と我々が言う場合、我々は結句つぎのことを言うにほかならない、いわく、彼（神）が無限である限りにおいてではなく、かえって彼が人間の精神の本性を通じて説明される限り、あるいは彼が人間の精神の本質を構成する限りにおいて、神がこの又はかの觀念を有するのであると。また、たんに彼が人間の精神の本質を構成する限りにおいてではなく、さらに彼が人間の精神の觀念と共に同時にまた他の事物の觀念をも有する限りにおいて、神がこの又はかの觀念を有する、と我々が言う場合には、それは、人間の精神が事物をたんに部分的に、あるいは不十全に、のみ知覚することを意味

するのである\*。——この一節はスピノザの著書に極めて頻繁に現われてくる「限りにおいて」「quatenus」といって言い廻しの一つの典型を示すのであるが、この「限りにおいて」の問題は別の機会に改めて考察することとして保留し、ここではたんに人間の精神が神の無限なる知性の一部分であると言われた点を注意するにとどめておきたい。

\* *ib.*, pp. 94-5. —なお、神の無限の知性もまた、それがすでに知性として思惟の一樣態であるかぎり、能産的自然にはなく、かえって所産的自然に帰せらるべきことについては、右に(一〇において)見られた第一部定理三一を参照されたい。

わたしはここで『エティカ』の第三部と第四部とを省略して直ちに第五部の考察に移ることとしたい。

『エティカ』第五部は「知性の力、あるいは人間の自由について」と題されている。その定理一五にいう、「自己ならびに自己の感情を明晰かつ判明に理解する者は神を愛する、そして、自己ならびに自己の感情を明晰かつ判明に理解することがより多ければ多いだけ、それだけ彼はより多く神を愛する」と\*。その証明はこうである。いわく、「自己ならびに自己の感情を明晰かつ判明に理解する者は(第三部定理五三によって)喜びを感じる、そして彼の喜びは(前の定理によって)神の観念を伴なう。したがって彼は(感情の定義六によって)神を愛し、そして(同じ根拠から)自己ならびに自己の感情を理解することが多ければ多いだけ、それだけ彼はより多く神を愛する。Q. E. D.」\*

\* *Opera II*, p. 290. —右の証明に援用された第三部定理五三は「精神が自己ならびに自己の活動力を考察するとき、精神は喜びを感じる、そして、精神が自己ならびに自己の活動力をより明晰に表象すればするだけ、それだけ精神はより多くの喜びを感じる」である。また右に「前の定理」といわれている第五部定理一四は、「精神は、あらゆる身体の感情、あるいは諸事物の表象が神の観念に關係づけられるようにすることができる」である。また右に援用された「感情の定義六」は第三部の終りの方に見られるものであって、「愛は外的原因の観念を伴った喜びである」である。

第五部定理一七は「神は受動なる感情 *Passionum* をもたず、また喜びあるいは悲しみのいかなる感情によっても動かされない」である\*。その系にいう、「本来的に語るならば、神は何人をも愛さずまた憎まない。なぜなら神は(前

定理によって) 喜びあるいは悲しみのいかなる感情によっても動かされない、従って神は(感情の定義六および七によつて) 何人をも愛さずまた憎まない」と。<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> *ib.*, p. 291. —感情の定義七は「憎しみは外的原因の観念を伴った悲しみである」である。

定理一九は「神を愛する者は、神が彼を愛し返すことに努力することをえない」<sup>\*</sup>である。その証明はこうである、いわく、「もし或る人がそうした努力をすれば、彼は(この部の定理一七の系によつて) 彼の愛する神が神でないことを欲するのであり、従つて(第三部定理一九によつて) 悲しむことを欲することとなるであろう、これは(第三部定理二八によつて) 不合理である。従つて、神を愛する者は、云々。Q. E. D.]」<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> *ib.*, p. 292. —第三部定理一九は「彼の愛するものが破滅させられると表象する者は悲しむであろう。それに反し、保存されると表象する者は喜ぶであろう」である。また第三部定理二八は「それが喜びへと寄与すると表象するすべてのものを我々は実現しようと努力する。それに反し、それが喜びに背反する、あるいは悲しみへと寄与すると表象するすべてのものを我々は遠ざけよう、あるいは破滅しようと努力する」である。

右にスピノザは明晰判明な認識に媒介された神への愛について語った。いわゆる「神に対する知性的な愛」“Amor Dei intellectualis” がそれである。そしてこれは若き日のスピノザと晩年のスピノザとに一貫して見られる基本思想の一つであり、その限り彼の哲学的直観の重要な一部を形成するものと言われてよい。『知性改善論』において「神の全自然との統一」と呼ばれ、また『短論文』において「神と合一し神を享受すること」と呼ばれたものがそれ以外ならない。<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> 拙稿「善について」、同志社法学第八九号、四〇—四二頁参照。

ところでスピノザは人間の神への愛を説くと共に、神の人間への愛はハッキリこれを否定した。そしてこれもまた

スピノザの神について(下)

『短論文』から『エティカ』にかけて彼の思想を一貫する重要な規定の一つであった。たとえば『短論文』第二部第二四章において、彼は、愛というのはたんに思惟の一つの様態であるにすぎず、こうした様態を实体たる神に帰属させることは全く不可能である、との理由から、神の人間への愛を否定した。(本稿の**五**を参照)。また『エティカ』第一部の定理三一は「たとえそれが有限なものであれ、あるいは無限なものであれ、とまれ現実的な知性、ならびにまた、意志、欲望、愛、等々は、所産的自然に帰せらるべきであって、能産的自然に帰せらるべきではない」であった。(本稿の**八**を参照。——なお、この定理の証明については右の**一〇**を参照)。そして『エティカ』第五部においては、右に見られたように、定理一七の系において「本来的に語るならば、神は何人をも愛さずまた憎まない」と言われ、したがって定理一九において、「神を愛する者は、神が彼を愛し返すことに努力することをえない」と言われたのであった。

そしてそれはスピノザの「神即自然」の根本思想から見ても当然の帰結でもあった。神は能産的自然として、存在しかつ活動する一切の有限な事物の自由にして内在的な原因であると言われる。自由な原因とは自己以外の何ものによっても強制されず、自己の本性の必然性に従って諸物を生産する原因の謂いである。また内在的な原因とは、移行的原因のごとく自己の外に何ものかを生産するのではなく、かえって自己の内に諸物を生産すると共にまたそれらをどこまでも自己の内に包容する原因の謂いである。存在し活動する一切の事物の原因たり、根柢たり、かつ場所たるごとき永遠・無限の实体、これがスピノザのいう神即自然であったのである。したがって延長的諸物の無限に多様な運動と静止とはすべて神即自然を基盤として初めて可能であり、また思惟的諸物の無限に多様な思惟作用、すなわち欲望、意欲、愛憎、等々の一切の作用もまたすべて神即自然を基盤として初めて可能である。しかしそのように



一方に運動と静止、他方にもろもろの思惟作用を可能ならしめる究極の基盤たる神即自然は、それ自身としては、そうした諸限定を超越したものとわれねばならない。諸物の運動がそれにおいて初めて可能な神そのものは自ら運動するとは言われえない。しかしまた静止するとも言われえない。運動ならびに静止といった諸状態を自己の内に初めて可能ならしめる原理そのものは、そうした諸状態を越えたものと言われねばならない。<sup>\*</sup>それと同様に、欲望とか意欲とか愛憎とかいった思惟の諸状態がそれに基き、それに即し、それを通じて初めて可能とされるていの原因たり、根柢たり、場所たる自然そのものは、自ら欲望し、意欲し、愛憎するとは言われえない。——スピノザが神の人間への愛を否定したのはこうした彼の世界観からしてじつに当然のことであったと言われねばならない。

<sup>\*</sup> 運動あるいは静止はそこに運動しそこに静止する場を前提とする。もしこの場がさらに運動あるいは静止するとすれば、それはさらに高次の場を前提し、かくて無限にいたるであろう。神即自然は一切の運動、静止のそこに初めて可能となる究極の場として、それ自身は運動と静止とを越えたものでなければならぬ。

しかしここで我々は一つの思わざる難関に逢着する。というのは、『エティカ』第五部定理三五において我々はつぎのような意外な言葉を読むからである、いわく、「神は無限の知性的愛をもって自己自身を愛する」<sup>\*</sup>“Deus se ipsum Amore intellectuali infinito amat.”<sup>\*</sup>——その証明はこうである、いわく、「神は（第一部定義六によって）絶対的に無限である、すなわち（第二部の定義六によって）神の本性は無限の完全性を樂しむ、しかも（第二部の定理三によって）それ自身の観念を伴なって、すなわち（第一部の定理一一および定義一によって）その原因の観念を伴ってである、そしてこれは我々がこの部〔第五部〕の定理三二の系において知性的愛と名づけたところのものである」<sup>\*</sup>

<sup>\*</sup> *ib.*, p. 302. — 第一部定義六はすでに度々見られたように「神のもとに私は絶対的に無限なる存在、すなわち、その各々が永遠にして無限なる本質を表現する無限に多くの屬性より成るところの实体、を理解する」である。第二部の定義六は「実在性と完全性のもとに私は同一のもの

のを理解する」である。同じ部の定理三は「神の内には必然的に彼の本質ならびに彼の本質から必然的に帰結するすべてのものの觀念が存在する」である。第一部の定理一は「神、あるいは、その各々が永遠にして無限なる本質を表現する無限に多くの屬性より成るところの实体は、必然的に存在する」である。同じ部の定義一は「自己原因のもとに私は、その本質が存在を内に含むもの、あるいは存在するとしてでなければその本性が思念されえないところのもの、を理解する」である。第五部定理三二の系は「第三種の認識からして必然的に神への知性的な愛が生ずる。何となれば、この種の認識からして原因としての神の觀念を伴った喜び、すなわち神への愛が生ずる。それは我々が神を現前的として表象する限りにおいてではなく、かえって神が永遠であることを我々が理解する限りにおいてである。そしてこれは私が神への知性的な愛と名づけるところのものである」である。——なお、右に第三種の認識と言われたものについては拙稿「善について」、同志社法学第八九号、四四頁以降を参照されたい。

つぎの定理三六はこうである、「精神の神への知性的な愛は、神がそれをもって自己自身を愛するところの神の愛そのものである、ただし、神が自己自身を愛するのは、神が無限である限りにおいてではなく、かえって神が人間の精神、ある種の永遠性の下に考察された人間の精神、の本質によって説明されうる限りにおいてである、すなわち、精神の神への知性的な愛は、神がそれをもって自己自身を愛するところの無限の愛の一部分である」\*。この定理に一つの系が附加されている、いわく、「そこからして、神は、彼が彼自身を愛する限りにおいて、人間を愛すること、したがって、神の人間への愛と、精神の神への知性的な愛とは一にして同じきものであること、が帰結する」\*。

\* *ib.*, p. 302.

右の定理においてスピノザは、神が彼自身を愛するのは「彼が無限である限りにおいてではなく」 *non quatenus infinitus est* と明記した。永遠にして無限なる实体としての神即自然には「愛」といった思惟の一つの様態を帰属せしめることはできないからである。その限り右の定理は必ずしも彼のこれまでの所説と矛盾するものではないであろう。しかし、それにしても、神が彼自身を愛するとか、またその限りにおいて人間を愛するとかいった右の定理なら

びに系の表現において、われわれは、何としても、透徹無比とも言われるべきスピノザの思索にまぎれ込んだ一抹の異分子ともいふべきものを看取せざるをえないであろう。

では右の定理ならびに系は『エティカ』から惜しみなく抹殺されるべきであろうか。あるいはどこまでも保存すべきであろうか。<sup>\*</sup>この問題を解く鍵は、右の定理における「神が人間の精神、ある種の永遠性の下に考察された人間の精神、の本質によって説明されうる限りにおいて」という言葉の内に存するものようである。さきにも言及された、スピノザ哲学に固有な「限りにおいて」：“*quatenus*”の問題である。この問題の解明を通じて、能産的自然としての永遠・無限の神と、所産的自然の一部分としての有限な諸個物、したがって人間の身体ならびに精神、との関係もいますこし明らかにされることができようであろう。わたしははずれ項を改めてこの問題を取りあげる機会をもちたいと願っている。しかしそれはそれとして、ともかく私は以上をもって、かなり長きにわたった本稿をひとまず閉じるところとしたい。

\* ウォルフによれば、『エティカ』の第五部全体はそれまでの部分に比して著しく品質が落ちるといふ。というのは、ここでの諸考察（とくに定理一〇以下）はもはや殆ど哲学に関係せず、かえって、不滅性と神の愛という二つの新しい概念を導入し、そしてそれを『エティカ』の究極の成果として掲げることによって、キリスト教への一つの橋を架けることを意図しているからである。かくて「最後の諸定理の若干（三五、三六）においてスピノザは、人間の神への愛に対して、神の諸被造物への、わけでも人間への愛を対置する、こうした人間的な諸感情が全包括的な実体には疎遠であることを彼は第一部において明らかにしたにも拘らず。そしてそれによって彼は外観上彼の神のキリスト教化 *Verchristlichung seines Gottes* を成就する、実際にはその対立は止揚もされず、またたんに緩和されることさえなしに。定理一〇以下の諸論説は時代精神への単なる譲歩とのみみなざるべく、『エティカ』の理解には何一つ寄与するところがない」。Hans M. Wolff, *Spinozas Ethik*, München 1958, S. 92. — わたしはしかしウォルフのこの見解に直ちに同意するにさきだって、項を改めていますこし詳しくスピノザの見解、わけでも能産的自然と所産的自然、あるいは実体としての神とその様態としての諸個物との関係についての見解、を検討する機会をもちたいとおもう。